

季刊

湘南自然誌

Vol.25

園児と自然に触れ合う中から
生まれたコラム

四季のコラム

園児や地域の皆さんからの
投稿写真を季節毎に掲載

湘南発 みんなでつくる! 生きもの図鑑

地域の自然を
知るう! 学ぼう! 伝えよう!

ひらおかようちえん **アクションレポート**

はじめての 湘南ビーチコーミング

茅ヶ崎・平塚海岸でビーチコーミング初体験!
漂着物118種類を紹介～貝類・甲殻類専門家一寸木肇先生の解説付～



2022 春

自然はみんなのワンダーランド!

四季のコラム

平岡幼稚園児と共に自然に触れ合う中から
生まれた自然にまつわるコラムです。

文：堀田 佳之介 (ほった よしのすけ)

平岡幼稚園 園長

草むらから「ジーーーーー」と鳴き声をするよ!

春～初夏にかけてのこの時期の夜、草むらなどからジーーーーーと鳴く虫の声を聞いたことはありませんか?そんな時は、懐中電灯を片手に、そ〜と覗き込んでみてください。翅(はね)を細かく震わせて鳴くキリギリスの仲間の姿が確認できるはずですよ。その正体は、この時期の湘南地域ならクビキリギリスかシブイロカヤキリでしょう。

クビキリギリスは市街地～山地まで広く分布し、各所で鳴き声を聴くことができます。一方、シブイロカヤキリは分布が局所的で、ススキなどのイネ科植物が茂るようなところ(平塚市では河川の土手や丘陵地など)に分布します。両種とも鳴き声のボリュームは大きく、走行中の車の中でも、窓を開けておくとよく聞こえてくるほどです。

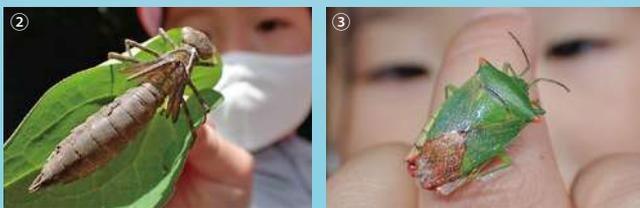
姿がよく似る両種ですが、クビキリギリスは「くち(アゴ)」が赤っぽく、シブイロカヤキリは黒っぽいんです。頭の先端の形も異なります。鳴き声も似ていますが、クビキリギリスの方がやや高く、シブイロカヤキリは低く濁って聞こえるので、慣れれば聴き分けることができます。

両種の寿命は約1年。夏に孵化した幼虫は、秋に羽化して成虫になり、そのまま越冬します。そして、春になると繁殖のためにオスが鳴きはじめ、その声は初夏まで聞くことができます。騒がしく聞こえる方もいるかもしれませんが、湘南地方では春～初夏を感じるもっとも身近な虫の声です。



①鳴くシブイロカヤキリ ②クビキリギリス(上)シブイロカヤキリ(下)
③クビキリギリスの方が後脚が長い ④成虫で越冬する両種(写真はクビキリギリス)
※クビキリギリスは緑色・褐色両方いるが、シブイロカヤキリは名の通り褐色のみ

初夏！生きもの賑わう平岡幼稚園ビオトープ



①オオシオカラトンボ羽化 ②ヤブヤンマ抜け殻 ③ハサミツノカメムシ
④ベッコウバエ ⑤キンケトラカミキリ ⑥アシナガオトシブミ(左)と揺籃(右)

初夏の陽ざしが眩しい季節となり、園内では様々な生きものが見られるようになってきました。水辺では続々とトンボが羽化し、子どもたちが“ぬけがら”探しを楽しんでいます。ぬけがらは親の姿にくらべて、とても小さいので驚くようです。幼虫の背中が割れて中から成虫がでてくると、短時間でお腹や翅（はね）を伸ばします。この神秘的な姿を多くの子どもたちに観察して欲しいと思っています。ちなみに今年、既に6種（クロスジギンヤンマ、ヤブヤンマ、マルタンヤンマ、オオシカラトンボ、ショウジョウトンボ、アジアイトトンボ）の羽化が確認されました。これから夏にかけてオニヤンマ、アキアカネ、ウスバキトンボ、オオアオイトトンボなどの羽化が期待されます。

トンボをはじめ色々な生きものが出現している園内ですが、今年、園内初記録の昆虫も何種か見つかったのでご紹介します。1種目はハサミツノカメムシで、園児により発見されました。緑色に鮮やかな赤色が目立つ美しいカメムシで、オスは赤色の缺（ハサミ）がありとてもカッコイイのです。2種目はベッコウバエで、これも園児により発見されました。大型でなかなかの美麗種です。3種目はキンケトラカミキリで、園庭の大ケヤキの丸太に飛来したところを園児が発見しました。4種目はアシナガオトシブミ。オトシブミ類は樹木の葉を器用に折り畳み、その中に産卵をします。これを揺籃（ようらん・ゆりかごの意）と呼びます。以前、これを開いて中の卵を観察した時に、元通りに折り戻すのに苦労したことを覚えています。人間が同様に折り込もうとしても容易ではない作業を、小さな体でやってのけることには本当に驚かされます。

園内をビオトープにして14年目になりますが、まだまだ新しい発見がでてきます。住宅地や耕作地に囲まれる環境にもかかわらず、たくさんの生きものが集まる平岡幼稚園のビオトープは、いつも未知なる出会いにワクワクできる場所です。

平岡幼稚園のビオトープが増えました！

今年度より平岡の森に隣接する斜面地 215 m² (65 坪) が園地になり、平岡の森が 1206.6 m² に拡張されました。今後は、地形の変化を利用した整備の幅を広げることができるようになり、今以上に多様な生物が集まることが期待されます。また、斜面の上と下を行き来することができるようになるので、子どもたちの探検の楽しみの幅も広がることでしょう。

まずは、今は外来植物を抜き取り、在来の植物が生えてくれるように管理をしていきます。また、園児が安全に立ち入れるように、フェンス、門なども設置する予定です。



新しい土地(写真左)は、平岡の森にある旧園舎の階段(写真右)により通じてます。

ビーチコーミングとは？

砂浜など海岸に流れ着いた漂着物を拾って観察することをビーチコーミングと言います。漂着物と言っても、自然のものから人工物まで色々あります。自分が面白いと思ったら何でも拾い集めてみましょう。そして、それが何なのか？どのような由来のものなのか？を想像しながら、仲間たちと語り合ってみましょう。ひとつひとつの漂着物からさまざまな物語が生まれてくると思います。そのような経験は、きっとあなたの人生を豊かにしてくれるでしょう。

自分が面白いと思ったものを集めてみよう。

海と山は繋がっている

スギ・ヒノキやクルミの実が砂浜でよく見つかるのは、海が川を介して山と繋がっているからです。丹沢や箱根の森から供給されるミネラル豊富な水は、たくさんの海の生物を育む重要な役割を担っています。ビーチコーミングをすることで、貝類をはじめとした海の生きものや、森から流れ着いた物などから、さまざまな繋がりを体感できるでしょう。



Navigator
一寸木 肇 先生

ちよつきはじめ/1951年、神奈川県小田原市生まれ。幼少時より貝や甲殻類にのめり込む。横浜国立大学で生物学を学んだ後、神奈川県内の小学校で教鞭を執る。元日本初等理科教育研究会理事長。現大井町教育委員会委員。自然園園長（公財）日本自然保護協会「自然観察指導員講習会」講師。著書に「シロツメクサの花のふしぎ」科学のタネを育てよう少年写真新聞社、共編著に「復刊自然の観察」農文協、「箱根・丹沢フィールドノート」箱根・丹沢陸水研究会、「小学校理科教育はこう変わる」学校図書、などがある。

解説：一寸木 肇
写真：編集部

幼稚園児と集めた サザンビーチがさき Apr - May.2022 漂着物 Collection

2022年5月に、一寸木 肇先生ご指導の元、平岡幼稚園の有志家族とともにビーチコーミングイベントを行いました。その下見（同年4月）も含めて見つかった漂着物を紹介します。皆さんが興味を思ったものを集めた結果、それぞれの感性が光る多様な漂着物コレクションができました。

茅ヶ崎海岸の特徴 茅ヶ崎海岸は、小田原方面に比べると遠浅なので、砂浜に棲む生きものが豊富です。また、烏帽子岩（姥島）に象徴されるように、岩礁帯が点在するため、磯の生きものの漂着物も多くみられることが特徴です。



1 カズラガイ



2 バイ



3 カモメガイの一部



4 メダカラ



5 クチベニガイ



7 フジノハナガイ



8 ソメイヨシノの実



9 エビスガイ



6 イボニシ



10 ビーチグラス



11 摩耗した貝殻の一部



12 玩具

1 カズラガイ

大型で美しい貝。水深10～50mの砂底にすむ。漢字では葛貝。模様がクズ（葛）の根に似ているところから付いたとも言われる。

2 バイ

砂底に棲む肉食の貝。「ばいかご」と呼ばれるトラップで採取し、食用とされた。残りの貝殻は砂や泥を詰めて「こま（独楽）」に。これが「べーごま（ばいごまが転じたもの）」の原形。

3 カモメガイの一部

泥岩に孔（あな）を開けてその中にすむが、大きくなると、孔から出られなくなってしまう。ギザギザしたやすりの働きをする部分が残っている。

4 メダカラ

タカラガイ（宝貝）の間では一番ポピュラー。表面の光沢やフォルムから、貝細工に使われた。潮間帯～水深80mの岩礁や転石帯にすむ。

5 クチベニガイ

口紅貝。裏側を見れば、赤い縁取りでその名に納得。浅海の砂底にすむ。殻は小型だが、とても分厚い。

6 イボニシ

潮間帯の岩礁で普通に見られる。他の貝を襲って食べる。茹でると独特の匂いがあり、食欲は湧かない。

7 フジノハナガイ

遠浅の細砂底にすみ、波に乗って移動する。裏側が紫色なので、「藤の花」。湘南、特に片瀬海岸では、かつて多く見られた。

8 ソメイヨシノの実

これも「さくらんぼ」。苦くて渋いけれど、季節の移り変わりを教えてくれる。河川の土手沿いの桜並木から流れてきたのだろうか？

9 エビスガイ

岩礁や磯の間にすむ。橙色～赤褐色で美しい。似た名前のオキナエビスガイは別グループの貝である。

10 ビーチグラス

ビールやサイダー、清酒などの空き瓶が割れて波に繰り返しもまれ、角が丸くなったりすりガラスになったりしたもの。ガラス瓶が少なくなった今、貴重品かも。

11 摩耗した貝殻の一部

波に繰り返しもまれ、壊れて小さくなり、やがて自然に還っていく。そんな自然の摂理を教えてください。

12 玩具

どんな子が遊んでいたのだろうか？ なぜここにあるのだろうか？と考えるとドラマが動き出す。これもビーチコーミングの楽しみの一つ。



13 コゲチャタケ



14 バカガイ



15 チョウセンハマグリ



16 オミナエシダカラ



17 ハマグリの間種？
(小さい個体)



18 ミドリイガイ



19 ムラサキイガイ



20 アシヤガイ



21 ツツミガイ



22 ヒバリガイ



23 クジャクガイ



24 マガキ



25 ュカイ (小さい個体)



26 カリガネエガイ

13 コゲチャタケ

タケノコガイの仲間。その名の通り竹の子のような形。水深 10～50mの砂底にすむ。

14 バカガイ

浅海で砂底の湘南海岸には多い。足が大きくて貝殻に取まらない姿を、舌をだらしなく出している様に見立てて名がついたようだ。むき身や乾物は「あおやぎ」と呼ばれて流通。

15 チョウセンハマグリ

相模湾では内湾性のハマグリではなく外洋性の本種が見られる。近年、稚貝を放流している。殻はハマグリより厚く、昔、大きな殻から白い礫石を採った。味はよく「地はま」と呼ばれ、高値で取引される。

16 オミナエシダカラ

潮間帯～水深 30mの岩礁や砂礫底にすむ。

17 ハマグリの間種？ (小さい個体)

相模湾には基本的にハマグリは生息しないが、写真のものはハマグリ特有の模様が見られる。ただ、殻の形がシナハマグリ (現在、流通しているのはほとんどこれ) に近いので、雑種とも考えられる。

18 ミドリイガイ

国外外来種で相模湾でも 1970 年代頃から知られるようになった。似た種類でもエギイガイ (バーナ貝) があり、パエリアなどに使われることがある。

19 ムラサキイガイ

随分昔に日本へ入ってきた外来種。船、漁網、港湾の困りもの。特に船に付着すると速度が落ちてしまう。最近では「ムール貝」として日本でも料理で使われるようになった。絵本「スイミー」に出てくる「からすがい」はこれ。ちなみに本当の「カラスガイ」は淡水性。

20 アシヤガイ

潮間帯の岩礁底で見られるが、ビーチコミングではあまり見つからない。大きく開いた殻口が美しい。

21 ツツミガイ

浅海の砂底に棲むタマガイの仲間で、殻は平たく、表面は平滑。

22 ヒバリガイ

潮間帯の岩礁に群生。生体は殻皮で覆われる。

23 クジャクガイ

同じく潮間帯の岩礁に群生する。

24 マガキ

殻の形は不規則で、内湾の岩礁に群生する。パーベキューの残骸であることも。

25 エガイ (小さい個体)

岩礁性の二枚貝で、岩と岩の隙間に足糸でへばりついている。

26 カリガネエガイ

同じく岩礁性の二枚貝で、岩と岩の隙間に足糸でへばりついており、本種のほうが多い。



27 ヤツデヒトデ



28 ハスノハカシパン



29 クロフジツボ



30 アワブネ



31 ベッコウガサ



32 ヨメガカサ



33 アマオブネ



34 発砲コンクリート



35 軽石と付着したコケムシ



36 流木



37 サザエのふた



38 シドロガイ

27 ヤツデヒトデ

岩礁性のヒトデ。驚異の増殖能力の持ち主で、通常8本の腕を持つが、4本ずつに分裂して増殖を繰り返す。

28 ハスノハカシパン

砂泥底にすむウニの仲間。砂泥底中の有機物を食べている。ハスの葉の葉脈のような模様があり、生体には細かい棘がある。

29 クロフジツボ

フジツボのフジは「富士」。貝に見えるが、実はエビ・カニと同じ甲殻類。岩礁の潮間帯に見られる。殻を下から見ると多孔構造になっているのは干潮時に日射による熱から身を守るためと言われる。

30 アワブネ

潮間帯の岩礁に普通に見られる。別名クルスガイというが、英語ではスリッパのような形から [Slipper shell]。

31 ベッコウガサ

岩礁や転石についているカサガイの仲間。この仲間の中では貝殻の高さが高く、裏面にはべっこう模様がある。なかなかの美味で、地方によっては郷土料理にもなっている。

32 ヨメガカサ

岩礁や転石についているカサガイの仲間。貝殻の高さは低く、裏面は銀色。殻も模様はさまざま。

33 アマオブネ

岩礁性の貝。石灰質のふたは半円形で、裏面に独特の突起がある。

34 発砲コンクリート

軽石と間違えられるが人工物で、発泡の孔(あな)が均一なので区別がつく。耐火性建材や美術の彫刻教材によく使われている。

35 軽石と付着したコケムシ

軽石は火山噴出物で、どこの火山から海流に流されてきたのだろうか?。コケムシ(触手動物)が群体をつくるくらい長い時間海に漂っていたのだろう。

36 流木

枝だったり、節だったりするが、もっと大きい材木も。嵐の後に打ち上がる流木は、昔は地域住民の建材や薪となった。現在では、独特の風合いを醸し出す流木はインテリアなどに利用されることも多い。

37 サザエのふた

摩擦が激しいが、大きさからサザエだろう。写真は裏面。表の小さな突起はなくなっている。

38 シドロガイ

潮間帯下より水深50mの細砂底にすむ。やや深いところに生息するため、ビーチコミングで見つけることは少なめ。動くさまを「しどろもどろ」と表現したと言われている。



38 バテイラ



39 ネコガイ



40 トコブシ



44 ツメタガイとそのふた



41 ウノアシ



42 ウメの種子



43 モモの種子



45 キクノハナ



47 チリボタン



46 ヤドカリの仲間のはさみ



48 釣りのゴミ



49 ダンバイキサゴ



50 キサゴ

38 バテイラ

岩礁にすむ。「馬蹄螺」だが、鮮魚店では「しっただか(尻高)」と呼ばれ「磯もの」の代表として店頭に並ぶ。

39 ネコガイ

浅海の砂底にすむタマガイの仲間。

40 トコブシ

アワビに似るが、貝殻の孔の数は6～8個ある。アワビの仲間は3～4個。岩礁にすむ。裏面はオーロラのような真珠層が美しい。

41 ウノアシ

岩礁や転石についているカサガイの仲間。「鶺鴒の足(この場合、脚ではない)」に見立てて。

42 43 ウメの種子 モモの種子

川から流れてきたのか？誰かが食べたあとか？想像するのが楽しい。

44 ツメタガイとそのふた

砂泥底にすむ肉食性の貝。他の貝を襲い、丸い孔を開けて中身を食べる。丸い孔が開いた二枚貝や巻き貝を見ることがあるが、この仲間の仕様だ。ふたは革質。名の由来は、足がゼリーのようで持つと冷たいことから。

45 キクノハナ

菊の花に似ていることが名の由来。岩礁や転石についているが、カサガイの仲間ではなく、なんとカタツムリの仲間に近い。

46 ヤドカリの仲間のはさみ

全体が平たくて、爪と爪の間がつまっており、貝殻に入っている時に蓋となる形なので、ヤドカリだとわかる。種名は不明。

47 チリボタン

岩礁性。殻の色彩は変化に富むが、赤褐色のものが多い。

48 釣りのゴミ

何気なく捨てたテグスや釣り針が、海鳥をはじめとする多くの生きものの命を脅かす。ビーチコーミングを楽しみながら、回収しよう。

49 ダンバイキサゴ

湘南海岸を代表する貝と言ってもよい。浅い海の砂底に棲む。地元で「ながらみ」として流通することもあり、酒蒸しにすると美味しい。

50 キサゴ

前種と同様、砂底にすむが、より小さい。近似種のイボキサゴとともに、昔は色を付けておはじきにされた。江ノ島で小さな網の袋に入れてお土産となっていたのは、ずっと昔のこと。



51 サルボウ



52 サトウガイ



53 オニアサリ



54 カバザクラ



55 オオモモノハナ



56 ナミノコガイ



57 ベンケイガイの一部



58 割れたカコボラとその幼貝



59 ウズイチモンジ



60 タブノキの芽



61 イタヤガイの一部



62 古い缶のパーツ



63 クモヒトデの仲間

51 サルボウ

アカガイの仲間、砂底にすむ。本種は肋(ろく=すじのこと)が32本前後。写真の個体は30本。

52 サトウガイ

同じくアカガイの仲間、砂底にすむ。本種は肋(ろく)が38本前後。写真の個体は36本。

53 オニアサリ

潮間帯の砂や礫底にすむ。食用になる。

54 カバザクラ

浅海の細砂底にすむ。殻は薄く、黄色みを帯びた桃色が美しい。2本の細い白帯が走るのが特徴。

55 オオモモノハナ

浅海の細砂底にすむ。殻は薄く桃色で、時に白色のものも見つかる。

56 ナミノコガイ

フジノナハガイ(P4)とともに、遠浅の細砂底にすみ、波とともに移動する。真っ白な個体も見つかる。

57 ベンケイガイの一部

砂底にすみ、湘南海岸には多い。貝殻が厚く大きくなることから「弁慶」の名が付いたとも言われる。古代人は穴を開けて腕輪にしたそう、県内でも出土している。

58 割れたカコボラと幼貝

岩礫底に生息し、厚い革質の皮で覆われている。皮を取り除くと、茶褐色のきれいな貝殻が現れる。内臓にテトロドトキシン(毒)を持つと言われる。

59 ウズイチモンジ

潮間帯の岩礁で普通に見られる。ふたは丸い革質。ちょっと見ウラウスガイに似るが、こちらはふたが石灰質。

60 タブノキの新芽

新しい季節がやってきたことを知らせてくれる。海も陸もつながっていることを実感する。

61 イタヤガイの一部

ホタテガイの仲間だが、イタヤガイは、片方の貝殻が極端に膨らむ反面、もう一枚は平たい。そこで膨らんだほうに柄を付け、おたまとして用いた。砂底にすむ。

62 古い缶のパーツ

「プルタブ」という言葉も死語に。漂着物は時代の移り変わりも教えてくれるので、世代を超えた語り合いが楽しめる。

63 クモヒトデの仲間

ヒトデと付くが、ヒトデの仲間とは違うグループの生きもの。体と腕が別々になっているのが特徴。



64 ワスレガイ



65 火山由来の石



66 玉髓



67 カリバガサ



68 ナミマガシワ



70 ヘソアキクボガイの一部



69 丹沢山地由来の石



71 トマヤガイ



74 陶磁器の一部



72 ヤシャブシの実



73 スペスペオウギガニの甲



75 まつぼっくりの芯



76 ドングリ帽子 (殻斗)



77 ヒノキの実



78 スギの実



79 ヨコバイの一部

64 ワスレガイ

殻の膨らみは少なく扁平な感じで、軟体部も少ない。浅海の砂底にすむ。表面の模様は変異が多い。

65 火山由来の石

火山ガスが抜けた孔がいっぱい。玄武岩質のようで、富士火山起源のものかもしれない。

66 玉髓

成分は石英と同じ二酸化ケイ素。瑪瑙(めのう)には縞模様があるが、玉髓にはない。昔は火打石として利用されていた。

67 カリバガサ

「狩場笠」の意。深いところにいるはずだが・・・

68 ナミマガシワ

色や形は多様だが、どれも殻は真珠光沢があり、光を通す。岩礫性。

69 丹沢山地由来の石

凝灰岩かホルンフェルス。石英の脈が走っている。相模川経由か？

70 ヘソアキクボガイ

へそがあれば本種で、へそがなければ「クボガイ」。どちらも裏面に緑色があるのが目印。岩礫性。

71 トマヤガイ

岩礫性の二枚貝。「古屋(あばらや)」の屋根をイメージした名。

72 ヤシャブシの実

川から流れてきたのだろう。この仲間にはタンニンが多く含むので、古釘と水を加え、「お歯黒」をつくった。

73 スペスペオウギガニの甲

大きなブイや浮きについているムラサキガイやオオアカフジツボの間に潜んでいる。成体は茶褐色だが、カニは乾くと赤褐色になることが多い。Spepspeo-ugai とは別種。

74 陶磁器の一部

これらは新しいもので、すり鉢や茶碗のかけらも見える。鎌倉の材木座海岸では、古い青磁の破片が拾えることも。

75 まつぼっくりの芯

リスがかじったまつぼっくりは、まるでエビフライのようにになるが、これはそれ以上にスリムだ。

76 ドングリ帽子 (殻斗)

小さな鱗片が見えることからコナラかマテバシイあたりか。場所から考えると、公園に植栽されたマテバシイでは。

77 ヒノキの実 スギの実

山からのお土産か。丹沢などの植林地から川へ、そして海に流れてきて漂着したのだろう。

79 ヨコバイの一部

潮間帯～水深 30mの砂礫底にすむ。



80 ムラサキウニの一部



81 魚の骨いろいろ



82 プラスチックごみ



83 中国製の漁具



84 モミジガイ



85 ミノガイの仲間



86 ショウジンガニの甲とはさみ



87 シマメノウフネガイ



88 ヒラツメガニのはさみ



89 ウミギクの一部



90 クリ



91 ワタトリカイメン

80 ムラサキウニの一部

ウニは岩礫性で、棘が取れると規則正しく並んだ基部が現れる不思議な生きものだ。

81 魚の骨いろいろ

上は尾椎、右はコイの咽頭骨で、これでタニシなどを砕いてしまう。

82 プラスチックごみ

もっと細かくなればマイクロプラスチックだが、この大きさでも飲み込んでしまう生きものはいる。また、可塑性などの添加物が溶け出している可能性もある。便利なプラスチックだが完全に自然へ戻ることはないので、できるだけ回収しよう。

83 中国製の漁具

漁網の浮きで中国語が読み取れる。この色の浮きは有害物質が含まれるという噂も。湘南海岸でも海外の漂着物が見られることがある。

84 モミジガイ

砂泥底に暮らすヒトデで、砂底中の有機物を餌としている。

85 ミノガイの仲間

この仲間同定が難しいが、おそらくウスユキミノガイではないかと思われる。殻を広げ、ヒラヒラとした外套膜を使って巧みに泳ぐと言う。

86 ショウジンガニの甲とはさみ

岩礫性のカニで、県西部では「まがに」と呼ばれて味噌汁に入れて出汁を取る。カニは乾くと赤褐色になることが多いが、本種は元々赤っぽい。

87 シマメノウフネガイ

本来は北アメリカ産だが、東京湾や相模湾で見られるようになった国外来種。他の生きた貝に張り付き、成長する。大きい個体は雌になり、その上の小さい個体は雄となり繁殖する。

88 ヒラツメガニのはさみ

砂底にすむガザミの仲間だが、甲は丸い。時々、鮮魚店にも出ることがある。

89 ウミギクの一部

岩礫性で、突起が出るが漂着物では失われることが多い。殻の色は赤・橙・黄・白など変化に富む。

90 栗

山から川を伝って流れてきたのだろう。山の幸が海でも見られるのは楽しい。

91 ワタトリカイメン

カイメン（海綿）は、神経も血管も脳みそもないある意味エゴな生きもの。英語ではスポンジと呼ばれ、天然のスポンジとして利用される種類もあるが、本種では体を洗おうなどと考えない方がよい。ガラス質が多く、かえって肌荒れを起こしてしまう。



92 フジのさや



93 不明



94 ミクリガイ?の一部



95 ヤツシロガイの一部



97 ヒメヨウラクの一部



98 オニグルミ
(アカネズミの食痕あり)



96 焼き物の一部



99 シジミの仲間



100 ヒメグルミ



101 オオアカフジツボ



102 アカフジツボ



103 トリの骨の一部



104 コウイカの貝殻 (甲)

92 フジのさや

山か公園から流れてきたのだろう。昨年のものかも。

93 不明

動物の爪のようにも見えるが、何なのかわからない。石灰質ではないので、貝ではないことは分かる。ビーチコーミングではこういう謎にも出会う。

94 ミクリガイ?の一部

摩耗が激しく種名は断定できないが、砂底に普通に見られるミクリガイの可能性が高い。食用になる。

95 ヤツシロガイの一部

砂泥底にすむ貝で、ミカン〜リングくらいの大きさになる。大きめの割りに殻は薄く、打ち上げられるまでに割れてしまうものが多い。

96 焼き物の一部

青色の釉薬が残っている。楽焼きか?

97 ヒメヨウラクの一部

岩礁帯でよく見つかる普通種。腐肉食性。

98 オニグルミの種子 (アカネズミの食痕あり)

河畔に生えることが多く、果実は川で運ばれる間に果皮が取れてしまう。なお、アカネズミの食痕は通常左右2カ所に開けられる。

99 シジミの仲間

地元の川に棲んでいたマシジミか、それとも台所から出たものか・・・。食用として流通の多い貝は、どこから来たものなのか判断するのがむずかしい。

100 ヒメグルミの種子

ハート形に近いので「ハートぐるみ」とも。オニグルミよりずっと少ない。

101 オオアカフジツボ

貝ではなく甲殻類。普段は潮間帯より下の海中で生活しているフジツボで、係留のブイや定置網のロープにも付着する。

102 アカフジツボ

貝ではなく甲殻類。前種よりかなり小型。岩場だけでなく船底、係留のブイなどにも付着する。

103 トリの骨の一部

骨が中空なので、トリだとわかる。

104 コウイカの貝殻 (甲)

スルメイカやヤリイカと違って、コウイカの仲間は大きな舟形で石灰質の貝殻を持つ。これを飼鳥に与えてカルシウム不足を補ったりしたり、弓道では粉にして滑り止めに使ったりすることも。



A ズップロックを上手く使って袋を作ってきた参加者。B 次々と発見報告が。C 気になるもので両手がいっぱい。D ツメタガイが開けた穴を利用したアクセサリー。漂着物の独特の風合いはクラフト素材としても面白い。E ホンダワラとアマモなど海藻・海草類も見つかりました。F みんなで見つけた漂着物を一寸木先生に解説してもらおう。G カツオノエボシ（クラゲの仲間）。有毒なので注意。打ち上っていたら絶対に触らないようにしましょう。

砂浜で遊ばせたいか？砂場で遊ばせたいか？

ビーチクリーナーなどの機械で砂浜のごみを取り除くと、本来自然に還っていくものまでなくなってしまいます。これでは子どもたちに本来の豊かな砂浜を伝えることはできません。皆さんは子どもたちを砂浜で遊ばせたいですか？それとも砂場で遊ばせたいですか？今回のビーチコミングでは様々な漂着物に出会えました。私は子どもたちに、いつまでも多様な発見ができる自然な砂浜を残したいと考えています。そのためには、私たちの生活が海につながっていることを意識して、大がかりな機械を使わなくても自然度が高い砂浜を維持できるようにしていきたいものです。

Special Thanks

ご協力ありがとうございました

安部旺介・圭司・由貴力・明香里 / 河野直法郎・颯太郎・紀子 / 佐藤帆高・弘樹・優美・千早 / 高橋楓・幸一・芽衣子 / 新山みあり・成治・佳美 / 星野隼輝・光彦・恵子 / 丸山あかり・結・幸子・大輔

ビーチコーミングの愉しみ方。



まずは海に出かけよう

ビーチコーミングは、いつでも、だれでも手軽にできます。海流によって漂着しやすい場所もありますので、色々と歩いてみましょう。「干潮時」「海が荒れた後」は、より多くの漂着物に出会うチャンスです。安全に留意して、ぜひ漂着物との出会いを楽しんでみて下さい。

気になったものを持ち帰ってみよう

漂着物を拾い集めて楽しんだ後は、お気に入りのものを持ち帰ってみましょう。箱に入れて並べてみたり、小瓶に入れてみたりするだけでも綺麗です。工作の素材としても面白いです。漂着物は、皆さんのアイデアでさまざまに活用できます。



いろいろな場所を散策してみよう



6月に平塚海岸に行ったら、違ったものが見つかったよ

a. ヒメタニシ 在来種の淡水貝で、沼など多少水質が悪いところに多い。川から流れ出たものだろう。b. ムシロガイ? 幼貝 潮間帯付近の砂礫底に普通。c. ユウヒザクラガイ? or アコヤザクラガイ? いずれも細砂底にすむ。d. シイノミヨフバイ? の一部 潮間帯の岩礫底にすむ。e. スクミリンゴガイ 通称「ジャンボタニシ」。国外外来種の淡水貝。食用目的で導入されたが、県内でもイネなどへの農作物被害を拡大させている。川から流れ出たものだろう。f. ヒメアサリ? 岩礁の間にある砂礫中にすむ。g. レンジャクガイ? ウラシマガイの仲間のレンジャクガイだろう。細砂底にすむ。h. ホタルガイ 殻の色彩には変異が多い。細砂底に普通。i. エガイやフネガイの仲間 摩耗して殻が薄くなっているが、幼貝だろう。この仲間は岩礁帯にすむ。j. キンセンガニ 甲の左右に突起。沿岸の砂底にすむ。k. シロスソカケガイ? 殻が内側に湾入しているように見えるので、本種に同定した。潮間帯の岩礫底にすむ。l. ヒラコプシ ヒラテコプシに似ているが、甲が丸いこと、はさみに毛がないことで区別される。砂底にすむ。m. クダマキガイ? の一部 細砂底にすむ。生体はもっと水管（下に伸びる部分）が長い。n. ナデシコガイ 殻は黄色、橙色、褐色など変異が多い。多くの放射肋は不規則。潮間帯の岩や小石に付着している。

